

---

# 学校臨床の新展開

## — ⑭夏休み —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

---

夏休みに入ったある暑い暑い日の朝、京都駅前に大勢の小学生たちが集まっています。前に立つ大人が、「そしたらみんな、お父さんやお母さんになんて言うんだっかな？」と問うています。すると、みんなが「行ってきまーす」と声をそろえて応えています。どこかの子ども会か何かと思いきや、大人たちのTシャツの後ろには大手の塾の文字が。夏といえば夏期講習。いや、しかし、みんなはどこか楽しそう。そうです、最近の塾は勉強だけではなく、こういう自然体験合宿などもやるとは聞いていましたが、あまりにも大勢の子どもたちにびっくり。帰宅後、大手塾のホームページを見てみますと、こんなことが。

「一流の大学を卒業したからといって、社会で活躍できることにはならない。ただ進学すれば良い、もう、そんな時代ではなくなっているのです。」

そうそう、親が一番身に染みてわかっているでしょうと思いながら、ホームページを見てみますと、子どもたちに向けてさまざまな仕事を紹介したキャリア教育のページや保護者向けのペアレンティングまであります。さらに、安全対策もバッチリ対応していることを強調し、「お客様相談室」まで設けてフリーダイヤルで対応されています。少子化のなかで生き残りをかけた戦いだけに、各塾ともいっそう教育理念が問わ

れ、サービスの価値が問われるのでしょうか。最近では、勉強だけではなく学童保育的な機能を持たせた塾も出ています。親のニーズに合わせて、企業が先読みした親ニーズがあらたな親のニーズを生んだりしています。いま教育産業は、このように子どもに関するあらゆるサービスをパッケージにして販売するわけですが、これらのサービスはどの子もすべて享受できるわけではありません。貧しい生活のなかで、親が子どもを塾に行かすことが難しい家庭の子どもたちは、さらに、さまざまな機会を失うのではないかと思います。

夏休み、テレビでは次年度の新入学生用のランドセルのCMが流れています。昔のように赤と白というだけではなく、色もバリエーションが増えているようです。早いなど思っていると、知人が、もう大分前からやっていますよと。CMや販売は年々、早くなって今ではゴールデンウィーク明けくらいからやっているようです。私にはランドセルを見ると思い出すことがあります。児童養護施設に勤めていたときのSちゃん（新1年生）のことです。Sちゃんには、親がいますがランドセルを買ってあげることができませんでした。Sちゃんにとっては、つらい現実でした。そのため、施設が量販店から寄贈を受けたランドセルを職員から受け取り使っていました。（なお、東日本大震災が起きる前まで、日本中でいわゆるタイガーマスク現象が起きていたというのは記憶に新しいかと思いますが、それ以前から、施設へのランドセル寄贈は行われていました。）

そんなSちゃんが、集団登校の列の中で、前にいた同じ新小1年生の近隣の友達のランドセルを傷つけたというのです。帰ってきたSちゃんに「どうしたのかな」と聞くと大きな瞳に大粒の涙をためて、いつまでもいつまでも泣いていました。Sちゃんの友達のランドセルは大きな傷がついてしまったため、私は同等品を求めて購入し、Sちゃんと一緒に先方宅を訪れ、謝罪と弁償をしました。帰路、Sちゃんは泣きながら、お母さんにランドセルを買ってほしかったこと少しずつ訴えました。友達のランドセルはブランドのランドセル。Sちゃんのは、量販店の安価なランドセル。見た目にも歴然。でもそのことよりも、ランドセルを買ってあげたくても買ってあげられなかったお母さんの気持ちや、ランドセルを買ってほしくても買ってもらえなかった子どもの思いを大切に取扱わなかったことで、Sちゃんがほかの子どものランドセルを傷つけてしまったのだと思わないではいられませんでした。

夏休み、親子で楽しく過ごすことができる人々の傍らで、多くの児童養護施設では年々、家庭への一時帰省がかなわない子どもたちが増えているといわれています。Sちゃんもまた家庭への帰省がなかなか実現できずに、夏休みを施設で過ごすことが多かったのです。

さて、この夏休み、京都の花火大会で痛ましい事故がおきました。犠牲となられた

方々のなかに 10 歳の子どももいます。ご家族や、関係者そして何よりもご本人の思いを考えると胸が痛くなります。

「夏休み」、「花火」というと私には忘れることのできない記憶があります。何年生だったでしょうか、小学校低学年のある夏の夜、花火大会の花火を見に行こうと母とふたりで出かけた際、家の近くのクリーニング店から猛烈な炎があがっていました。私と母は火災の第一発見者だったのです。近隣に消防車を呼んでもらうよう知らせましたが、なかなか消防車がこないなか、火のむこうから「助けてー」「あつい」と泣き叫ぶ声が聞こえました。どうすることもできなかつた思い、どれだけ熱かつたんだろうと思うと、とてもつらかつたのです。この体験が対人援助専門職の端くれであるいまの私の源のひとつかもしれません。

今回は、「夏休み」というテーマで思いつくままに書いてみました。

「学校の先生は夏休みがあつてよろしいなー」という人は今でもいるかもしれませんが、私がスクールソーシャルワーカーとしてかかわる中学校の先生方は全く休みがない夏休みを過ごしておられます。補習、クラブ活動、生徒指導、研修…。授業がなくても心が休まらない日々です。この国の教師たちは、働きすぎではないでしょうか。先生方の傍らにいてそう感じない日はありません。